



日本赤十字社
Japanese Red Cross Society

茨城県支部

日赤茨城

2019.12

Vol. 191

Red Cross Ibaraki

このたびの台風第15号・第19号により被災された皆さまに
こころからお見舞い申し上げます。



救護所での医療活動(大子町)
※令和元年台風第19号災害

台風災害の被災地へ、医師らを派遣

台風第15号・第19号による被災者に対し、日本赤十字社は、茨城県を含む各被災地で救護活動やボランティア活動を展開しました。

これらの活動は、皆さまからお寄せいただく活動資金(寄付)を財源に実施しております。

本号では、日頃のご支援に感謝の気持ちを込め、活動の様子や被災地からの声をお届けします。



こころのケア活動(常陸太田市)
※令和元年台風第19号災害

台風第19号
災害への対応



被災地での活動を動画で紹介しています!

ハートちゃん

発行元

日本赤十字社 茨城県支部
〒310-0914 茨城県水戸市小吹町2551
TEL.029-241-4516 FAX.029-241-4714

令和元年台風第19号災害（令和元年10月）

令和元年10月12日(土)に東日本へ上陸し、関東甲信越・東北地方などで猛威を振るった台風第19号。大雨による河川の越水や堤防の決壊などにより浸水被害が相次ぎ、多くの地域に甚大な被害をもたらしました。

日本赤十字社は、直ちに被災者支援の活動を開始し、当支部では、水戸・古河赤十字病院から救護班やこころのケア班を派遣したほか、救援物資の配布、赤十字ボランティアによる炊き出しやボランティアセンターの運営支援などを行いました。



被災された方に寄り添い活動する救護班
(太子町)



リラクゼーションを行うこころのケア班
(常陸太田市、常陸大宮市、太子町)



被災地に救援物資を届ける救護員
(水戸市、ひたちなか市など)



避難所で温かい食事を提供するボランティア
(常陸太田市)

数字で見る日本赤十字社の活動

令和元年11月8日現在

派遣した救護班数
延べ**171**班(14班)

派遣したこころのケア班数
延べ**51**班(14班)

派遣した
災害医療コーディネートチーム数
延べ**90**班(6班)

救援物資の配布数
計 **27,264**点(2,766点)

※日本の各被災地で行った救護活動の実績数
※()内は茨城県内の実績数

被災地からの声をお届けします

太子町からの声 (太子町 吉成医院)

太子町では、この度の台風で久慈川と押川が氾濫し、地域医療を支えていた病院や診療所が浸水被害を受け、医療機器やカルテが水に浸かり外来機能が麻痺しました。

各医療機関の院長は、復旧作業の陣頭指揮を取る必要があり、診療に専念できる医師が圧倒的に不足する中で、日本赤十字社茨城県支部が、いち早く町内に救護所を立ち上げたことは、私たち医師だけではなく地域住民にとっても非常に心強く感じたはずです。

地域の医療体制では対応できない災害に見舞われた中で、日赤の活動や役割を再認識しました。

ご尽力頂いた多くのスタッフや関係者の皆さまに御礼を申し上げます。



太子町 吉成医院
院長

吉成 尚 さん

常陸太田市からの声 (常陸太田市役所)

常陸太田市では、今回の台風の影響で河川が氾濫し、200件超の床上浸水、100件超の床下浸水の被害がありました。

当市では、11月5日まで避難所を開設し、約60人の方が自宅の片づけや清掃作業をしながら、慣れない避難所生活を続けていました。

そのような中、避難者の皆さまに温かい食事を提供したいと考え、那珂市・ひたちなか市などの赤十字奉仕団の支援をいただきました。奉仕団員の方は、食事を手渡す際に、「お帰りなさい」、「お疲れ様でした」などと積極的に声をかけていただきました。

皆さまのご支援に心から感謝しています。



常陸太田市役所
社会福祉課 主任

埜 康弘 さん

支えてくださった皆さまに感謝 (太子町災害ボランティアセンター)

災害ボランティアセンターでは、太子町や県などの社会福祉協議会職員に加え、多くのボランティアにより運営されています。

日赤の防災ボランティアの方々は、片づけに使用するスコップなどの資材の配布や管理を担当し、寒さの厳しい時節に、資材洗浄のため水しぶきを浴びながら熱心に取り組んでいただき、「縁の下の力持ち」となる存在でした。

また、太子町赤十字奉仕団には炊き出しを行っていただき、被災された方々の心の支えとなりました。

当センターを支えてくださった多くの皆さまに感謝申し上げます。



太子町社会福祉協議会
事務局長

麻生 弘 さん

令和元年9月5日(木)に発生した強い台風第15号は、9日に勢力を維持したまま千葉市付近に上陸し、猛烈な風や雨により、千葉県を中心に多くの人的・住家被害が発生しました。

日本赤十字社茨城県支部では、古河赤十字病院から救護班を千葉県鋸南町などに派遣し、現地の保健師と協働で、避難所(避難所6・特別養護老人ホーム1)及び住居(76世帯)を巡回訪問し、健康チェック・救援物資の配布・ニーズ調査を行いました。



被災されたお宅を巡回訪問する救護班



ニーズ調査等を行う救護班

数字で見る日本赤十字社の活動

令和元年11月8日現在

派遣した救護班数
延べ49班(6班)

派遣したところのケア班数
1班

派遣した災害医療コーディネートチーム数
延べ34班

救援物資の配布数
計 7,334点(327点)

※日本の各被災地で行った救護活動の実績数
※()内は茨城県内の実績数

潮来市からの声



潮来市役所 社会福祉課 主幹
明間 由紀子さん

潮来市では、今回の台風の影響で家屋の屋根や壁が壊れ、大量の雨水が家の中に入るなど、大きな被害が発生しました。

当市では、日本赤十字社茨城県支部からの提供分と市で用意したブルーシート計800枚を、赤十字ボランティアの協力を得て市民の皆さまへ配布しました。地元の量販店ではブルーシートが売り切れの状態でしたので、早急な日本赤十字社の対応に感謝しています。

青少年赤十字の国際交流派遣事業 ～子どもたちがマレーシアを訪問～

赤十字が行う国際活動の目的や意義、その国に暮らす人々の生活など、広く世界の様子を理解するため、青少年赤十字活動に取り組む中学生・高校生を対象に、茨城・栃木・群馬の3県が共同で、海外派遣事業を行っています。

今回は、7月21日(日)～26(金)までの6日間、派遣事業に参加し日本とは異なる文化などを肌で感じてきた生徒の体験談をご紹介します。

茨城県立水戸桜ノ牧高等学校
大津 北斗さん



派遣にあたって、マレーシアの赤十字活動について事前学習をし、現地では日本との違いに着目して研修に臨みました。マレーシアも日本人道・博愛の精神で活動をしている点で共通していますが、例えば救急法一つにしても、傷メイクを施すなど、より実際に近い雰囲気や想定して講習を行っており、その手法は国によって異なることに驚き、実際に自分の目で確かめることの大切さを改めて感じました。

グローバル化が進んでいる今日、互いの国のことについて理解や尊重することが重要になってくると思います。今後、この経験を生かしてより意欲的に活動をしていきたいです。

茨城県立水戸第二高等学校
川上 優月さん



今回の訪問で、2つの印象的な出来事がありました。1つ目は言語についてです。現地の生徒たちは、言葉の壁を気にせずいろいろと伝えようとしてくれ、私も精一杯応える努力をしましたが、互いの意思が伝わったときは本当に嬉しく、伝えようとする気持ちが大切であると学びました。

2つ目は宗教についてです。現地の生徒からストールをもらい、その生徒と同じように頭に巻いてみました。すると生徒や先生など多くの方が喜んでくれて、「kawaii!」とたくさんほめてくれました。互いを尊重することの大切さが身をもって体験でき、この経験は私にとって一生の財産になりました。

茨城高等学校
大内 麻奈さん



これからの日本に一番必要な「多様性の中で生きる」ということを肌で感じる事ができました。IFRC(※)アジア太平洋地域事務所ではインドやイギリスなど様々な国籍の方たちが働いており、民族・宗教の壁を越え、意見交換を行っていました。

日本では出入国管理法が改正され、外国人労働者の増加が予想されます。異なる宗教や習慣に大きな戸惑いを感じる人がいるかもしれませんが、私は「多様性の中で生きる」ことが当たり前な社会になってほしい、そして、その社会で自分を試してみたいと思います。

※IFRC:国際赤十字・赤新月社連盟

常総学院高等学校
菱沼 恵衣さん



医療や福祉の現場、そして同年代の方々の赤十字社・赤新月社との関わり方を見て、その良い面や改善すべき面を学んだことで、日本の福祉を改めて考えることができました。また、現地の方々とコミュニケーションをとることで、お互いの文化を尊重し合う、日本にはない国民性を学ぶことができました。

派遣を通して福祉・医療に対する関心が深まり考えることができ、また、人とコミュニケーションを取る時に、チャレンジしてみようと思えることが多くなりました。学んだことはしっかりと今後に生かしていきたいです。



日本とマレーシアの青少年赤十字メンバーたち



お互いの文化を紹介し合う青少年赤十字メンバーたち

茨城県立竹園高等学校
川上 さくらさん



マレーシア派遣で私が最も印象に残ったことは、マレーシアの人の心の温かさです。現地では私のつたない英語に耳を傾けてくれる姿、そして、通じたときのフレンドリーな大きなリアクションに支えられ、コミュニケーションの楽しさを実感しました。相手へ自分の思いを伝えることが多かった派遣でしたが、他県や他国の同年代の仲間と過ごした時間は貴重でとても刺激的であり、大切な思い出です。

今回たくさんの人の支えのおかげでかけがえのない経験ができたことに心から感謝しています。この経験をもとにして感謝の気持ちを大切に、その気持ちを多くの人に伝えて、進んでいきたいです。

「ここで産んでよかった!」と感じてもらえる病院を目指して

当院は現在、産婦人科のスタッフを中心に「お産増やそうプロジェクト」でアイデアを出し合い、お産の環境を整える取り組みを積極的に行っています。

シャワーを利用する際、腰を曲げずにシャンプーへ手が届くよう高く棚を設置、体調によって食べる時間が遅れた時、温かい食事を取れるよう電子レンジを設置しました。今後は、マタニティヨガやWi-Fiサービス、ウォーターサーバー設置を検討し、過ごしやすい生活空間に改善していく予定です。

また、妊婦さんを更に美味しい食事で祝福するため調理コンサルタントを導入し、「祝い膳」だけでなく「一般食」もグレードアップしていくので楽しみにしてください。

外来では8月から、お腹の中にある赤ちゃんの動きや表情を立体的に見られる、4D超音波を導入しました。診察室で見た動画は、USBに記録し記念に持ち帰ることもできます(費用は別途発生します)。

私たちは今後も、地域周産期母子医療センターとして医療技術を磨きつつ、「歴史はあるかもしれないけれど、ホスピタリティが低くアメニティが少ない」というイメージを刷新する努力を続けていきます。



4Dエコー画像イメージ



食事の改善イメージ

第1回「ゆきはなフェスタ」を開催

令和元年10月19日、当院において、第1回「ゆきはなフェスタ」を開催しました。当日はあいにくの雨模様でしたが、たくさんの地域の皆さまにお越しいただきました。

イベントでは、認定看護師による講演会(手洗い体験・認知症予防のお話・皮膚スキンケア体験・緩和ケアについて・糖尿病にならないために)、病院職員によるストレスチェック、スタンプラリーをはじめ、お子さま向けには「赤十字クイズ」、「ユニフォームを着用したなりきり写真館」、「ハートラちゃんと遊ぼう」などを実施しました。

また、事前予約で応募いただいた「キッズ病院探検ツアー」では、坂野医師(心臓血管外科部長)が手術室の機能について説明した後、縫合体験を行い、その後、薬剤部の「お薬作り体験」などを実施しました。

参加者からは、「医療系の職業に憧れているのでとても貴重な体験になりました。」「普段できない体験ができて良かったです。」「とても楽しかったです。」などのお言葉をいただきました。

今後も、地域に根差した病院を目指して参ります。



縫合体験の様子:参加者と坂野医師(心臓血管外科部長)

水戸ホーリーホックコラボ献血を実施!

令和元年10月6日ケーズデンキスタジアム水戸で開催された水戸ホーリーホックホームゲーム「大宮アルディージャ戦」にて、コラボ献血を実施しました。

茨城県の献血協力者数(延べ)は、平成23年度をピークに年々減少傾向にあり平成29年度から平成30年度にかけては若干増加しております。

現在のところ血液製剤の安定供給に問題はありませんが、日本の少子高齢化が進んでいくと、将来の安定供給に支障をきたす恐れがあります。そのため、継続的に献血に協力いただいている方のご協力はもちろん、献血をしたことがない方からの新しいご協力が重要になります。

このような現状を踏まえ、今回の取り組みで若い世代や献血をしたことがない方に対しても「献血」に興味を持っていただくきっかけにしたいと考えております。

輸血用血液は人工的に造ることも、長期の保存もできません。ぜひ、お近くの献血ルームや献血バスでのご協力をお願いいたします。



当日の献血の様子

茨城県の年度別献血者数



県内献血者数推移

10月31日 ハロウィン



「ハッピー ハロウィン!」

子どもたちは、仮装していつもと違う雰囲気ワクワク。近所のグループホーム・デイホーム「お母さんの家」や茨城県支部でたくさんのお菓子をもらいました。

昼食はそこそこにお菓子をビックリするくらい食べる子どもたち。1年分のお菓子を食べた様な感じでした。大満足で子どもたちはお昼寝に入りました。夢の中でもまだまだお菓子を食べているかもしれませんね。



11月1日 オレンジリボンたすきリレー

11月は児童虐待防止推進月間です。乳児院の職員たちは、子ども虐待防止の象徴カラーであるオレンジ色のたすきをかけて沿道を走り、虐待防止の啓発を行いました。

日立・土浦・古河の3起点から茨城県庁までの約50kmを、各コースのランナーがリレー形式で走りました。

今回、茨城血液センターからもランナーとして協力していただき、乳児院の職員とともにたすきをつなぎました。



皆さまからお寄せいただく**活動資金**が、被災された多くの方を支援しています。

私たちが行う災害救護活動や救急法等講習などの事業は、皆さまから寄せられる活動資金を唯一の財源としています。

〈寄付にご協力をお願いします〉

この払込取扱票は、ご賛同いただきましたら、ご寄付を強制するものではありません。ご利用いただけると幸いです。

99 東京		払込取扱票	
口座記号番号	金額	千	百
001000	789872		
加入者名	料	備	免
日本赤十字社茨城県支部	金	考	
おところ・おなまえ			
お電話番号			
<input type="checkbox"/> お礼状と領収書が不要な場合は☑をお願いします。 <input type="checkbox"/> 不要 <input type="checkbox"/> どこでこのチラシを手にしましたか? (☑をお願いします) <input type="checkbox"/> 市報・町内会の回覧 <input type="checkbox"/> イベント <input type="checkbox"/> 赤十字講習 <input type="checkbox"/> 当支部からの郵送 (救急法・水上安全法・幼児安全法・健康生活支援講習) <input type="checkbox"/> その他() RI 日赤茨城(通常号)	日附印		
裏面の注意事項をお読みください。(ゆうちょ銀行)(承認番号 東第53203号)			
これより下部には何も記入しないでください。			

振替払込請求書兼受領証

口座記号番号	金額	千	百
001000	789872		
加入者名	日本赤十字社茨城県支部		
おなまえ			
ご依頼人	様		
料	日	附	印
金			
備考	免		

記載事項を訂正した場合は、その箇所に訂正印を押してください。切取らないでお出しください。

この受領証は、大切に保管してください。

i インフォメーション i



インターネットから、クレジットカードを利用して手軽に寄付することができます。

ご協力方法 **クレジットカード** 赤十字 クレジット 検索

STEP 1

クレジットカード寄付ページ

STEP 2

必要事項のご入力
(申込フォーム)

STEP 3

手続き完了
(ご寄付)



スマートフォンは
こちらから

その他、「口座振替による寄付」「遺贈・相続財産の寄付」などもお取り扱いしております。

また、日本赤十字社へのご寄付は、個人・法人ともに、税制上の優遇措置があります。

詳しくは、当支部までお問い合わせください。

☎ 029-241-4516 (組織振興課)



《例えば…》

¥2,000-のご協力が
集まると…

- ◎避難所などで生活する被災者に、**災害時用毛布1枚**を届けられます。
- ◎皆さまの支援が、被災された方の**「支え」**となります。

資金の有効活用のため、この受領証をもって日本赤十字社の受領証にかえさせていただきます。

なお、本受領証は、免税証として利用いただけます。

払込みいただいた金額は個人については、所得税法第78条第2項第3号の規定に基づく寄付金に該当し、法人については、法人税法第37条第4項に基づく寄付金に該当します。

〒310-0914 日本赤十字社
茨城県支部 組織振興課
電話 029-241-4516

〈ご注意〉

■この用紙は、機械で処理しますので、金額を記入する際は、枠内にはっきりと記入してください。また、本票を汚したり、折り曲げたりしないでください。

■この用紙は、ATMではご利用いただけません。

■この払込書を、ゆうちょ銀行又は郵便局の渉外員にお預けになるときは、引換えに預り証を必ずお受け取りください。

■この用紙による、払込料金は無料となります。

■ご依頼人様からご提出いただきました払込書に記載されたおとこと、おなまえ等は、加入者様に通知されます。

■この受領証は、払込みの証拠となるものですから大切に保管してください。

この場所には、何も記載しないでください。

この払込取扱票は、ご寄付を強制するものではありません。